

井相田 A 遺跡 1

—第4次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1469集

2023

福岡市教育委員会

井相田 A 遺跡 1

—第4次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1469集



遺跡略号 調査番号
ISA-4 2131

2023

福岡市教育委員会

序

福岡市は玄界灘を介して大陸・半島と一衣帶水の関係にあり、双方の交流が絶え間なくおこなわれてきました。なかでも現在の博多区が位置する福岡平野には旧石器時代から中世にかけての遺跡が数多く存在します。近年の著しい都市化により失われるこれらの文化財を後世に伝えることは、本市の重要な責務です。

本書は、賃貸マンション建設事業に伴う井相田 A 遺跡第 4 次発掘調査について報告するものです。この度の調査では古墳時代と鎌倉時代の集落跡を検出しました。この調査は從来発掘調査例が少なく、詳細が不明であった井相田 A 遺跡の様相を明らかにするという重要な成果をもたらしました。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の一資料として活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、関係者の皆様には発掘調査から本書の作成に至るまで深いご理解と多くのご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

令和 5 年 3 月 23 日

福岡市教育委員会
教育長 石橋 正信

例　言

- 本書は、福岡市教育委員会が賃貸マンション建設事業に伴い、福岡市博多区井相田3丁目4番6において実施した井相田A遺跡第4次発掘調査の報告書である。
- 本調査および整理・報告に要した費用の一部には国庫補助金を充当した。
- 本書に掲載した遺構・遺物の実測、写真撮影、報告執筆は主に阿部泰之が行なった。
- 本書で用いた方位は特に断りなき限り磁北であり、真北から $6^{\circ} 30'$ 西偏する。
- 遺構の呼称は竪穴住居跡をSC、溝をSD、土壌をSK、柱穴またはピットをSPと略称する。
- 本書にかかる記録・遺物等の資料は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。
- 本書の編集は阿部が行なった。
- 本書で報告する発掘調査の細目は以下の通りである。

遺跡調査番号	2131	遺跡略号	ISA-4	
所在地	福岡市博多区井相田3丁目4番6		分布地図番号	12 井相田
開発面積	638.00 m ²		調査面積	285.57 m ²
調査期間	令和3年10月12日～令和3年12月23日	事前審査番号	2020-2-1106	

本文目次

はじめに.....	1
1. 調査に至る経緯	
2. 調査の組織	
第1章 位置と環境.....	3
第1節 地理的環境	
第2節 歴史的環境	
第2章 調査の記録.....	7
第1節 調査の概要	
第2節 遺構と遺物	
第3章 まとめ.....	20

挿図目次

Fig.1 井相田A遺跡と周辺の主な遺跡 (1/25,000)	2
Fig.2 井相田A遺跡と既往の調査地位置図 (1/4,000)	4
Fig.3 調査区位置図 (1/1,000)	5
Fig.4 調査区全体図 (1/100)	6
Fig.5 調査区東壁土層断面実測図 (1/100)	7
Fig.6 SC01 実測図 (1/60)	8
Fig.7 SC01 床面上・カマド内出土遺物実測図 (1/3)	9
Fig.8 SC01 貼床内・主柱穴出土遺物実測図 (1/3)	10
Fig.9 SC01 埋土内出土遺物実測図 (1/3)	11
Fig.10 SC38 実測図 (1/60)	12
Fig.11 SC48 実測図 (1/60)	13
Fig.12 SC48 出土遺物実測図 (1/3)	13
Fig.13 SC01・48 出土石製品実測図 (1/3・7のみ 1/1)	14
Fig.14 SD16・19 実測図 (1/60)	15
Fig.15 SD19 出土遺物実測図 (1/3)	15
Fig.16 SK02・SP32 実測図 (1/30)	16
Fig.17 SK02 出土遺物実測図 (1/3)	16
Fig.18 ピット出土遺物実測図 (1/3)	17
Fig.19 遺物包含層出土遺物実測図 (1/3)	17
Fig.20 第7層出土遺物実測図 (1/3)	18

図 版 目 次

発掘調査着手前状況（南より）	21
調査区東半全景（南より）	21
調査区西半北部全景（南より）	21
調査区西半南部全景（北より）	21
調査区東壁土層（西より）	21
調査区東半南壁土層（北より）	21
SC01 東半床面検出状況（南より）	22
SC01 西半床面検出状況（北より）	22
Fig.7-1・2 出土状況（東より）	22
Fig.7-8 出土状況（北より）	22
Fig.7-4 出土状況（北より）	22
Fig.7-3 出土状況（西より）	22
SC01 カマド検出状況（東より）	23
SC01 カマド内 Fig.7-10 出土状況（北より）	23
SC01 カマド東西土層東半（北より）	23
SC01 カマド東西土層西半（南より）	23
SC01 カマド南北土層南半（西より）	23
SC01 カマド南北土層北半（東より）	23
SC01P2 土層断面（東より）	24
SC01 西半完掘状況（南より）	24
SC01 東半完掘状況（東より）	24
SC38 完掘状況（東より）	24
SC48 床面検出状況（西より）	24
SC48 カマド検出状況（南より）	24
SC48 カマド東西土層東半（南より）	25
SC48 カマド東西土層西半（北より）	25
SC48 カマド南北土層南半（東より）	25
SC48 カマド南北土層北半（西より）	25
SC48 完掘状況（北より）	25
SK02（西より）	25
SP32（東より）	26
SP32 土層（東より）	26
作業状況（南より）	26
発掘調査完了後状況（南より）	26

はじめに

1. 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、同市博多区井相田3丁目4番6における賃貸マンション建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を令和3年3月26日付で受理した。

これを受けた埋蔵文化財課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である井相田A遺跡に含まれていること、杭工事が予定され隣接地において発掘調査が実施されていることから確認調査を実施したところ、現地表面下60cmで遺物包含層を、105cmで遺構を検出したため、その保全等に関して申請者と協議を行った。

その結果、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、建物建設部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、令和3年9月21日付で埋蔵文化財調査業務委託契約を締結し、同年10月12日から発掘調査を、翌令和4年度に資料整理および報告書作成をおこなうこととなった。なお、本調査および整理・報告に要した費用の一部には国庫補助金を充当した。

2. 調査の組織

調査委託：個人

調査主体：福岡市教育委員会

(発掘調査：令和3年度 資料整理・報告：令和4年度)

調査総括：文化財活用部埋蔵文化財課	課長	菅波正人
調査第2係	係長	藏富士寛（3年度）
		井上蘿子（4年度）

調査庶務：文化財活用課	管理係	係長	石川あゆ子
		係員	内藤 愛

事前審査：埋蔵文化財課	事前審査係	係長	田上勇一郎
		主任文化財主事	森本幹彦
		文化財主事	山本晃平（3年度）
			三浦悠葵（4年度）

調査担当：埋蔵文化財課	主任文化財主事	阿部泰之
-------------	---------	------

下図掲載の埋蔵文化財包蔵地の範囲は平成 27 年 3 月現在の推定線であり、現在は変更されている可能性があります。本文の内容に直接関わらない遺跡は一部省略しています。

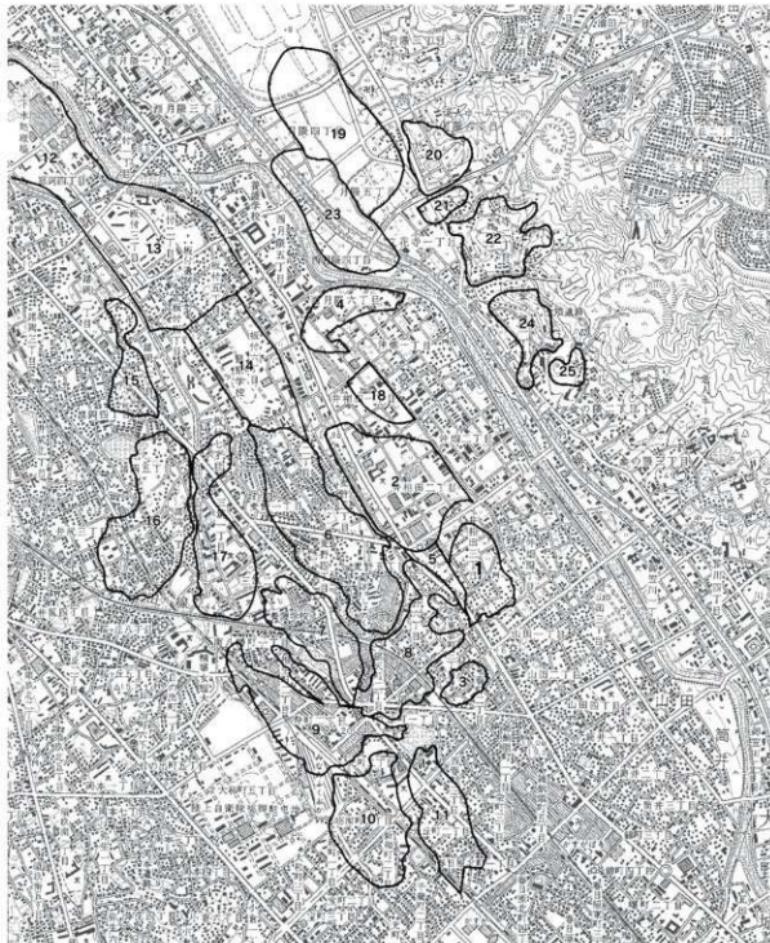


Fig. 1 井相田 A 遺跡と周辺の主な遺跡 (1/25,000)

- 1 井相田 A 遺跡 2 井相田 C 遺跡 3 井相田 B 遺跡 4 井相田 D 遺跡 5 井相田 E 遺跡 6 麦野 A 遺跡 7 麦野 B 遺跡
8 麦野 C 遺跡 9 南八幡遺跡 10 雜餉隈遺跡 11 中ノ原遺跡 12 那珂君休遺跡 13 板付遺跡 14 高烟遺跡
15 諸岡 B 遺跡 16 笹原遺跡 17 三筑遺跡 18 仲島遺跡 19 下月隈 C 遺跡 20 上月隈 B 遺跡 21 文殊谷古墳群
22 立花寺遺跡 23 立花寺 B 遺跡 24 金隈遺跡 25 金隈上屋敷遺跡

第1章 位置と環境

第1節 地理的環境

現在の行政区画上の福岡市は、東は三郡山地、西と南を脊振山地に囲まれ、博多湾を包み込むようにして玄界灘に面している。博多湾を囲む山地からは多くの河川が博多湾に注いでおり、それぞれが扇状地を形成し平野を構成している。現在は市街地化が進み旧状はほとんど窺えないが、もとは広大な農村地帯であった。そのなかの1つである福岡平野は中央部に春日方面から延びる低丘陵が位置し、那珂川と御笠川の流域はこれによって画されている。いずれの流域の沖積平野にあってもその微高地には多くの遺跡が存在するが、井相田A遺跡は福岡市域の南端部、御笠川中流域左岸の沖積微高地にある。今回報告する第4次調査地は遺跡の北東縁辺部、遺跡が乗る微高地の北端付近にあたる。

第2節 歴史的環境

井相田A遺跡は、弥生時代から中世にかけての遺構・遺物が検出されている複合遺跡である。以下、周辺の遺跡を含めて井相田A遺跡の各調査の概要を追っていきたい。

第1次調査区は第4次調査地に市道を挟んで南に隣接している。公園のフェンス設置工事に伴い実施され、調査範囲は4m²と狭小ながら弥生時代中期前半～中ごろの甕棺墓群が検出された。他の遺構は検出されていない。地山は粗砂で構成され、第4次調査での土層観察から北に向けて標高を下げるとともに粘質となることが想定される。地山の上には暗褐色土が堆積し、一連のものとなる可能性がある層が今回の調査で検出されている。

なお、弥生時代では、井相田A遺跡の北に隣接する井相田C遺跡では第3次調査にて前期の遺構・遺物が検出されており、周辺に当該期の集落が広がるものと推測される。その他の調査では旧河川から主に前期の遺物が出土している。

第2次調査は第4次調査地の西隣接地で実施された。調査地北縁の擁壁部分のみの調査だが、堅穴住居跡2軒・溝1条・井戸1基等、多くの遺構が検出され、第4次調査区の遺構検出状況と類似する。とりわけ溝SD004は第4次調査北端部で検出された溝に連続する可能性がある。

第3次調査は第4次調査地から南に約300m、戦前から集落が営まれていた地点で実施された。土壙1基・溝状遺構2条・井戸2基等の遺構が検出され、時期は中世初期、12世紀前半～中ごろに収まっていることが報告されている。

井相田A遺跡の調査では古墳時代の遺構は報告されていないが、井相田C遺跡では第6次・第8次調査において中期～後期の堅穴住居・土壙・井戸が検出されている。主に遺跡の北部に集落が形成されていたことが窺え、首長居宅の可能性も指摘されている。

古代では井相田C遺跡・E遺跡において古代山陽道・西海道が大宰府に至る最終区間「水城東門ルート」推定線に合致する溝が検出された。路面など道路に直接関連する遺構は検出されていないが、溝の方位や連続して概ね直線的に延びることから古代官道の側溝と推測される。また、麦野丘陵上の各遺跡からは8世紀代の堅穴住居が多数検出されているが、そのほとんどは短期間で廃絶する状況である。

調査中、近隣の住民から調査地付近に城郭が存在した旨伺ったが、調査結果や地割・字名からその痕跡は窺えなかった。なお、麦野A遺跡では東西約150m、南北約110mを測る中世後半の大規模な溝で区画される方形区画が検出されており、居館ないし城郭、寺院の存在を窺わせる。

※背景の地形図は大正末～昭和初頃に日本陸軍陸地測量部が作成したもの

※伏せアミは現代の道路台帳、実線は井相田A遺跡の範囲



Fig. 2 井相田A遺跡と既往の調査地位置図 (1/4,000)



Fig. 3 調査区位置図 (1/1,000)



Fig. 4 調査区全体図 (1/100)

第2章 調査の記録

第1節 調査の概要

調査地は井相田A遺跡が位置する沖積微高地の北端部に位置する。調査地周辺は昭和40年代前半に区画整理が行われ旧地形は窓えないが、戦前の地形図では畠の表記があり、北面・東面は1段下がって水田となっている。

今回の発掘調査で検出された遺構は竪穴住居跡3軒・溝2条・土壙1基・ピットである。

調査区東壁土層をFig.5に示す。第1～第4層までが現代の盛り土で、調査区北辺の崖を埋めており昭和40年代の区画整理時の造成土および耕作土である。第5層は鎌倉時代頃までの遺物を含むが、すべて細片で区画整理前の耕作土と推測される。第6層の上面が中世の遺構面である。非常に硬く縮まる人為的な盛り土で、集落を拡張するための整地層と推測される。本調査地の南、井相田公園内で実施された第1次調査では地山の上部に暗褐色土層が検出されており、一連の層となる可能性がある。第7層は自然堆積層で、この上面が古墳時代の遺構面である。当初第7層は遺物包含層と考えていたが、掘り下げの過程で遺物が出土する範囲とそうでない範囲がみられたうえ、第7層から出土した遺物と竪穴住居跡から出土した遺物同士が接合したことから、当該期の遺構は第10層上で検出したが、本来これらの遺構は第7層上面から掘り込まれていたと考えられる。その下の第8・9層は地山との漸移層である。

なお、地山の第10層の下部は褐灰色砂質土～明褐色粘質土～黄白色粘質土へと漸移的に変化する。第10層以下に遺物は含まれず、その上面は南西から北東方向へ低くなる。

竪穴住居跡のうち1軒は大形で、5世紀後半～末頃と推測される。溝と土壙は12世紀後半頃、ピットの多くは木の根痕で建物をまとめるには至らなかった。

出土遺物の多くは第7層を掘り下げる過程で出土した。土師器が多い。住居跡からは石製紡錘車の他、石製小玉、ガラス小玉片が出土した。溝や土壙からは中国製陶磁器が出土している。

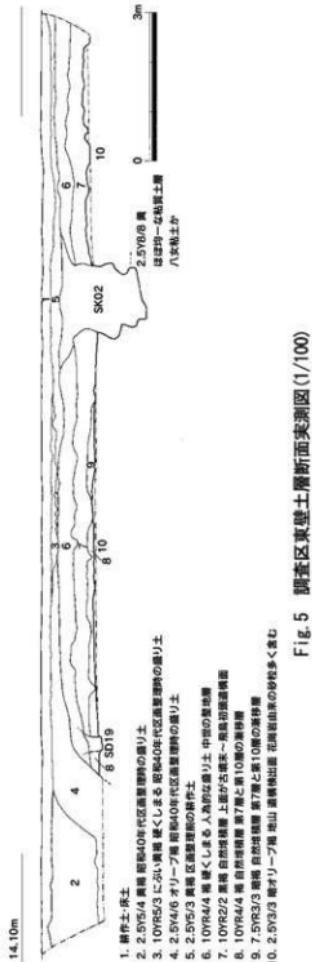
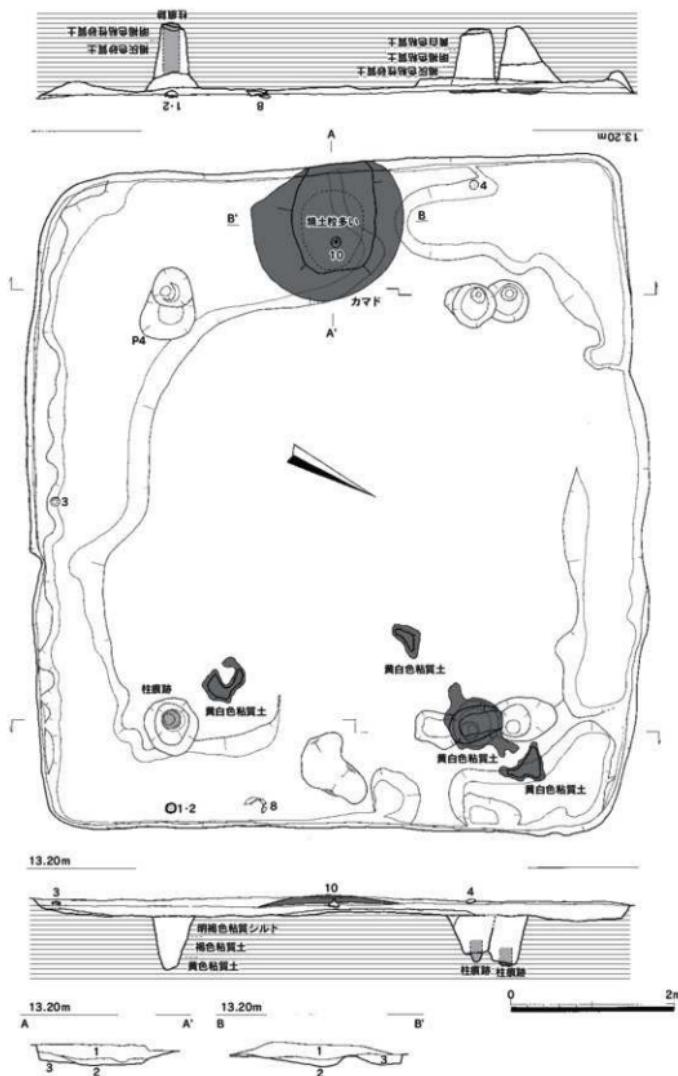


Fig. 5 調査区東壁土層断面実測図 (1/100)



1. 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 黄白色粘土ブロック非常に多く含む

2. 2.5Y4/2 棕灰黄色粘質土

3. 5Y3/1 オリーブ黑色粘質土 貼床の土

Fig. 6 SC01 実測図 (1/60)

第2節 遺構と遺物

1. 壊穴住居跡 (SC)

① SC01 (Fig. 6)

調査区中央で検出した。SC38に切られ、SC48を切る。平面形は隅丸長方形で、長辺8.3m、短辺7.0mを測る。検出面から床面までは深さ5cm前後だが、本来の深さは50~70cmほどだったと考えられる。貼床は地山を構成する土が主体となるが、Fig.5に示す第7・8層の土をブロック状に含む。掘方の凹凸に沿って周縁部が厚く、主柱穴に囲まれた範囲が特に硬化し、その表面はFig.5第7層の土色に似た黒色味を帯びる。

主柱穴は4カ所で検出した。柱穴のプランは貼床に覆われ、床面上では主柱の抜き取り痕のみ検出された。主柱穴・抜き取り痕とも径50~80cmの不整円形で、深さは掘方上面から70~80cmを測る。南東角・北西角の柱穴で径15~20cmの円柱形の柱痕跡が検出できた。北辺の柱穴は何れも2基切り合っており、2本の主柱を据え替えたことがわかる。北東角の柱穴のみ埋土に黄白色粘質土を多量に含み、主柱の抜き取り痕をカマドの壁体、またはカマド補修用の粘土で埋めたものであろう。

カマドは西壁中央部に接し、東西1.8m、南北1.7mを測る黄白色粘質土の広がりとして検出した。貼床上面に直接構築されているが被熱した形跡および下部構造は検出されなかつた。なお、中央部から脚部を失った土器高杯が1点、倒立した状態で出土した。カマドを壊すときに燃焼室内に据え置かれたものか。

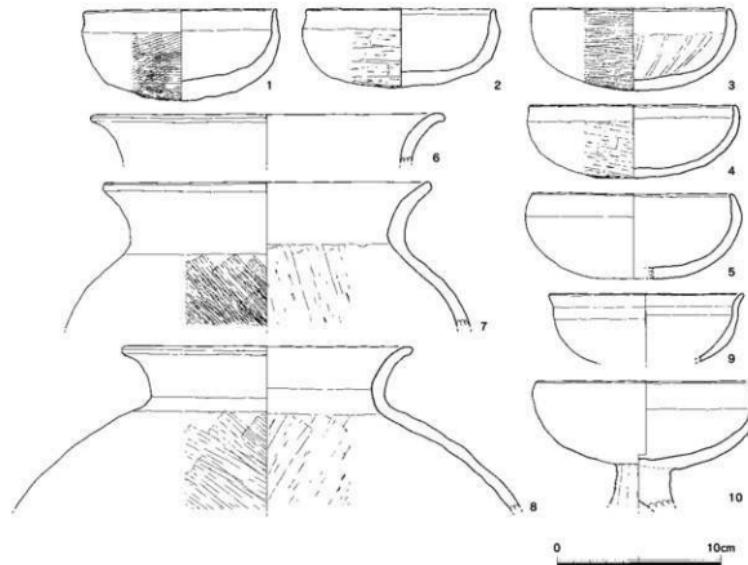


Fig. 7 SC01 床面上・カマド内出土遺物実測図 (1/3)

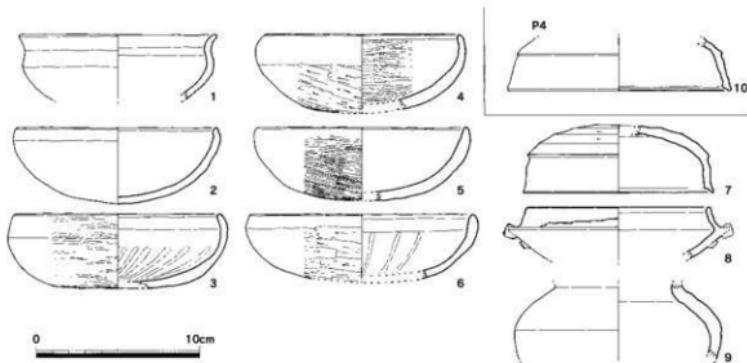


Fig. 8 SC01 貼床内・主柱穴出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物 (Fig. 7~9)

遺物はカマド内のほか、床面直上で東・西・南壁に近接して完形の土師器碗が複数出土した。その他、ガラス小玉が出土したが細片であることから図示していない。SC01 の時期は、出土遺物から 5 世紀後半～末頃と考えられる。

(Fig.7)

すべて土師器である。1～5 は碗で、1・2 は口縁部を上に 2 個体重なった状態で出土した。何れもほぼ完形だが 1 の口縁部は打ち欠かれ、外底は不定方向に粗雑に削られ、ハケメ状となる。2 は精緻なつくりである。3・4 は完形で出土。3 は外面は密なヘラミガキ、内面は上下方向に粗なヘラミガキが施される。4 は伏せた状態で出土した。外面の上部 1/4 程を除いて不定方向のヘラケズリで仕上げられる。5 は 1/4 個体程度の破片。6～8 は甕で、何れも口縁部から胴部上半にかけての小片である。9・10 はカマド内出土。9 は碗ないし高壺壺部の小片、10 は高壺である。カマドの中心部、燃焼室とみられる位置から倒立した状態で出土した。カマドを破壊する際に意図的に据え置かれたと推測される。脚部は打ち欠かれ、器壁は磨滅、特に外面は被熱し橙色を呈する。

(Fig.8)

10 を除き貼床掘り下げ時に出土した。1～6 は土師器碗である。1 は底部を欠く小片。2 は 3/4 個体残存し器壁は磨滅する。3 は内面に上下方向の粗なヘラミガキが施される。4 は外底のヘラケズリが顕著で、口縁部の一部に赤褐色を呈する部分があり赤彩されていた可能性がある。5 は外面を不定方向のハケで調整する。6 は底部を欠く小片である。7～10 は須恵器である。7 は蓋の小片。田辺編年 TK47 期にあたるか。8 は壺身の小片、かえりは低く内傾し受け部には重ね焼きの痕跡が見て取れる。9 は壺ないし甕の胴部。小片で外面に自然釉がうすくかかる。10 は主柱穴 P4 出土。堅緻に焼成された蓋の小片である。

(Fig.9)

1・2 は須恵器である。1 は高壺の小片。脚部上端には 3 方向の透かし孔が残る。2 は脚部の小片で脚部か。3～14 は土師器である。3 はミニチュア土器で外面上部は丁寧なナデで、外底部は粗なハケ



Fig. 9 SC01 埋土内出土遺物実測図 (1/3)

で仕上げられる。4～6は椀である。4は80%程度残存し外面に焼成時に生じた剥落が顕著に残る。5は赤彩されていた可能性があり、6は他の椀に比し器壁が薄く造られる。7・8は高坏である。7は脚部の小片、8は器壁に密なヘラミガキが観察される。9は鉢の小片で、器壁は厚く不定方向のナデで仕上げられる。10は甘の小片である。11・12は甕の小片である。何れも小形で11は器壁が厚く口縁部と胴部の接合痕が観察できる。12は外底面と口縁部に煤が付着し煮炊きに用いられたことが窺える。13・14は瓶のものとみられる把手である。

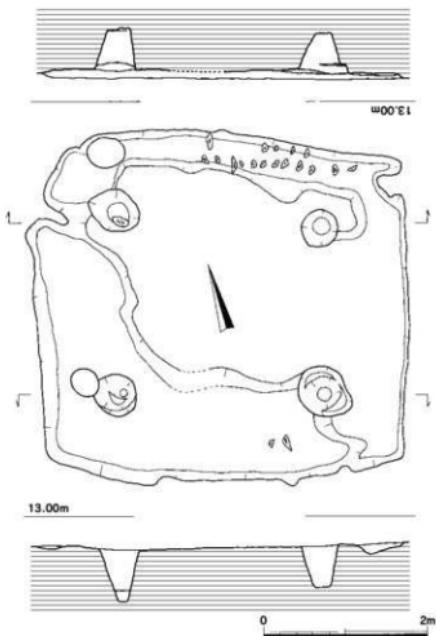


Fig. 10 SC38 実測図 (1/60)

③ SC48 (Fig. 11)

調査区北西部で検出した。SC01に切られる。西側が調査区外となるが平面形は隅丸長方形と考えられ、南東隅の丸みが大きい。東西3.1m以上、南北4.5mを測る。検出面から床面までは5cm前後だが、本来は深さ50~70cmほどの住居だったと考えられる。床を形成する貼床は地山を構成する土が主体となるが、Fig.5第7・8層をブロック状に含む。掘方の形状に沿って周縁部が厚く、主柱穴に囲まれた範囲が特に硬化し、その表面は第7層の土色に似た黒色味を帯びる。

主柱穴は2カ所で検出した。柱穴のプランは貼床に覆われていたと考えられ、床面上では明瞭に検出できなかった。径35~45cmの不整円形で、深さは掘方上面から35~40cmを測る。南東角の柱穴で径10cmの円柱形の柱痕跡が検出できた。この柱穴は2基切り合っており、少なくとも南東角の主柱は据え替えた可能性がある。

カマドは北壁中央部に接し、東西1.5m以上、南北1.3mを測る黄白色粘質土の広がりとして検出された。貼床上面に直接構築されているが被熱した形跡はない。土層断面からは中央部の貼床を地山に達するまで掘りくぼめている状況が見て取れる。

出土遺物 (Fig. 12)

1~4は須恵器である。1・2は坏身の小片で、2はカマド内出土。かえりが低く内傾する。3は蓋

② SC38 (Fig. 10)

調査区北西部で検出した。SC01を切る。平面形は隅丸長方形で、長辺4.35m、短辺3.8mを測る。

検出面では堀方の下部のみ検出されたもの。本来はFig.5第7層上面から掘り込まれ、50~70cmほどの深さだったと考えられる。貼床は地山に近似した暗灰褐色土である。掘方は周壁に沿って深く、北壁側では梢円~三日月形のくぼみが2列に検出され、住居構築時に用いられた鋤先の痕跡と推測される。

主柱穴は4基検出した。何れも径50~70cmの不整円形で、深さは掘方上面から50~60cmを測る。埋土は第7層に近似した黒褐色土で、柱痕跡は検出されず柱を根元まで掘って抜き取ったものと考えられる。

カマドは検出できなかった。

出土遺物

遺物はFig.13に示した鉄製品のほか、土師器・須恵器が出土したが、細片のため図示していない。

の小片。田辺編年 TK47 期にあたるか。4 は脚部の小片で、2 方向に透かし孔が残る。5 は土師器甕。口縁部の小片である。

住居跡出土石製品・鉄製品 (Fig. 13)

2 は SC48 出土、それ以外はすべて SC01 から出土した。1 ~ 3 は砥石の小片である。1 は粒子の粗い砂岩質の石材で叩き石に転用されている。2・3 は緻密な泥岩質の石材で磨滅するが、器壁に黒褐色の薄い付着物がみられる。目視による観察だが墨の可能性を考え、暫定的に硯の一部となる可能性を考えておきたい。4・5 は滑石製紡錘車である。4 はほぼ完形で重量 23.6g、5 は約 1/2 個体残存する破片で器壁は光沢があり精緻に仕上げられる。重量 18.8g を測る。

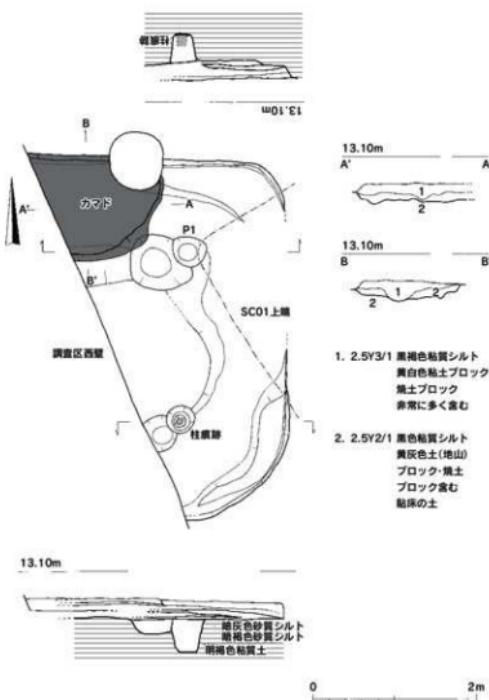


Fig. 11 SC48 実測図 (1/60)

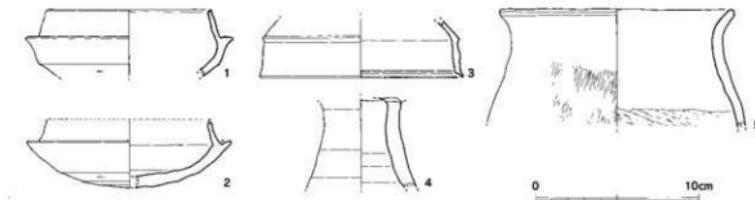


Fig. 12 SC48 出土遺物実測図 (1/3)

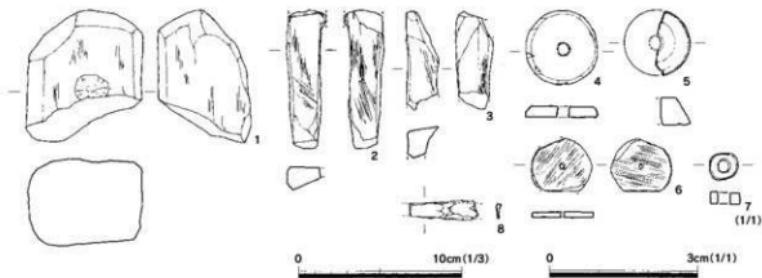


Fig. 13 SC01・48 出土石製品実測図 (1/3・7のみ1/1)

6は滑石製有孔円盤で縁辺部を欠損する。重量8.7gを測る。7は完形の滑石製小玉でSC01貼床内出土。重量0.13gを測る。8はSC38の主柱穴P3出土。鉄製刀子の刃部で両端を欠くもの。

2. 溝 (SD)

① SD16 (Fig. 14)

調査区北端部で検出した。後述するSD19を切る。崖線に沿うように構築され、東西の端部は調査区外に延びる。当初地山の第10層上で検出したものだが、残土反転後に第7層上でプランを検出できた。本来はさらに上の第6層上面から掘り込まれているものと考えられる。

SD16の幅は20cm～30cm、深さ5cmを測る。ただし第6層上面から掘り込まれていた可能性が高く、本来はさらに広く深い溝だったとみられる。底面には梢円～三日月形のくぼみが2列に並んで検出され、溝掘削時の鋤の痕跡と考えられる。断面は隅丸方形を呈し、土層からは流水・滯水のあった形跡は認められず、人為的に埋められている。

出土遺物

須恵器・土師器が出土したが、細片のため図示していない。

② SD19 (Fig. 14)

調査区北端部で検出した。SD16に切られ、崖線に沿うように構築される。第7層上面で平面プランを検出したが、本来はさらに上の第6層上面から掘り込まれているものと考えられる。前述のSD16とほぼ同様の位置に構築されており、掘り直しの結果複数の溝として検出されたものと考えられる。

SD19の幅は0.9m～1.3m、深さは10～30cmを測る。断面はゆるいV字形を呈し、土層からは流水・滯水のあった形跡は認められず、人為的に埋められている。出土遺物から時期は12世紀後半頃と考えられる。

SD16・19ともその位置から中世集落の北縁を画す区画溝と推測される。

出土遺物 (Fig. 15)

1は福建産白磁である。口縁部の小片で高台が直線的に高くなるタイプか。2は龍泉窯系青磁碗である。口縁部の小片で、内面に細く劃花文が施され初期龍泉窯系青磁の可能性がある。3は同安窯系青磁碗である。胴部の小片で外面に櫛目が施される。4は土製勾玉である。古い遺構から混入した可能性が高い。ほぼ完形で重量3.3gを測る。

3. 土壌 (SK)

① SK02 (Fig. 16)

調査区東縁で検出した。東部は調査区外に延びる。南北方向 1.1m・東西方向 0.8m 以上を測る不整円形の土壌と考えられ、遺構検出面からの深さは 1.2m を測るが、調査区東壁の土層観察から実際は第 6 層の上面、深さ 2.15m、平面プランは径 2.6m に達することがわかる。現時点では湧水ではなく井戸も認められないため、暫定的に土壌として報告する。

断面は上面から 30 cm ほどまでは緩やかな傾斜だが、それ以下にはほぼ垂直となり複雑に入りする。埋土は最下層のみ自然堆積であり潜水環境で堆積した可能性があるが、有機物起源の黒色土はみられず頻繁に底をさらったか、掘削当時は豊富な湧水があり井戸として用いられていたかついでしかあろう。それ以外は人為的に埋めた層である。最上層は下層との境界が四字形で一度掘り直されたものか。

出土遺物 (Fig. 17)

1 は土師器碗である。底部の小片で器壁は磨滅する。

2 は龍泉窯系青磁皿の小片である。

これらの遺物から、SK02 の時期は 12 世紀後半頃と推測される。

4. ピット (SP)

① SP23 (Fig. 16)

調査区北西部で検出した不整椭円形のピットで、西端は調査区外となる。東西径 1.2m 以上・南北径 40~55 cm を測る。底面は階段状となり、東から 2 段のテラスがあり深さ 6~20 cm を測るが、それ以西は深さ 70 cm と急に深くなる。埋土は第 7 層を主体とする黒褐色土だが第 10 層のブロックをわずかに含み、人為的に埋められている。

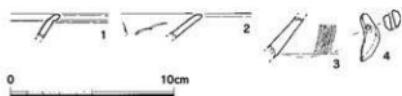


Fig. 15 SD19 出土遺物実測図 (1/3)

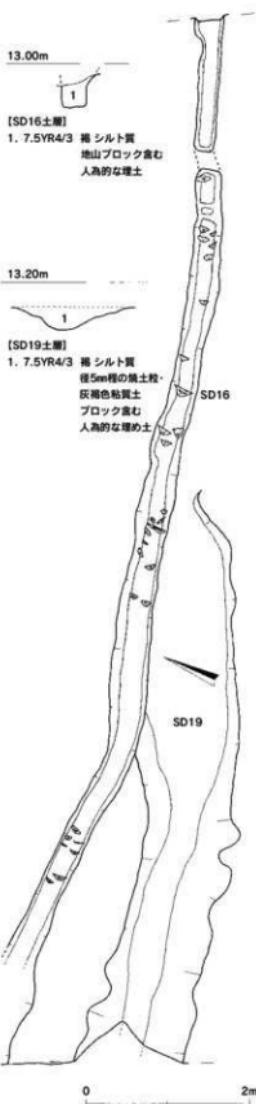


Fig. 14 SD16・19 実測図 (1/60)

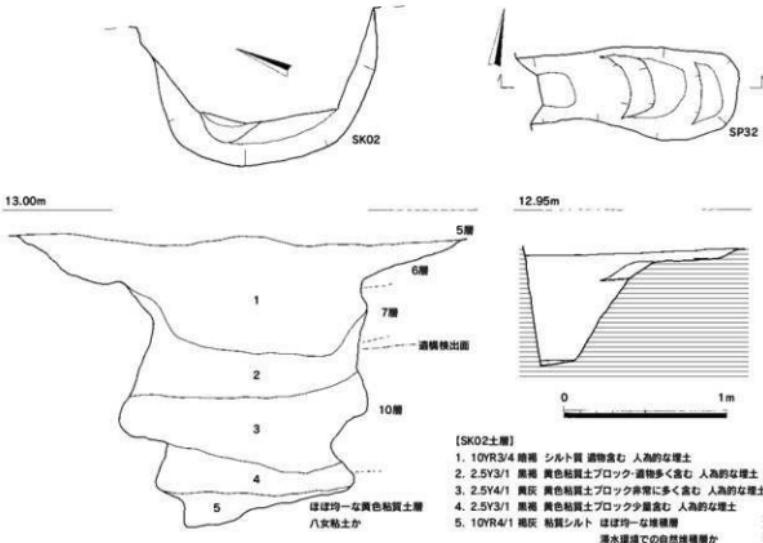


Fig. 16 SK02・SP32 実測図 (1/30)

出土遺物

遺物は土師器が出土したが、細片のため図示していない。

その他のピット出土遺物 (Fig. 18)

SP32以外のピットから出土した遺物である。1は壺身である。SP52出土。赤焼きで須恵器の技法で製作されたいわゆる似非土師須恵器。1/3個体残存する破片でかえりに段をする。2は土師器甕である。SP23出土。口縁部の小片。焼成が堅緻でこちらは似非須恵器の可能性がある。3は須恵器甕である。SP39出土。口縁部の小片で焼成は堅緻である。4・5は土師器である。4は椀の小片でSP58出土。赤褐色に発色し内面に粗なヘラミガキが施される。5は瓶のものとみられる把手で、胴部外面に直接貼り付けられる。

5. 遺物包含層

ここでは遺構以外、調査区東壁土層に示す遺構検出面より上の堆積層から出土した遺物のうち、主なものを報告する。とくに遺物が多い第7層の遺物を Fig.20 にまとめ、それ以外の堆積層から出土した遺物を Fig.19、調査着手前の表面採集や調査区壁面から得られた遺物を Fig.21 に図示した。

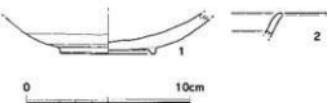


Fig. 17 SK02 出土遺物実測図 (1/3)

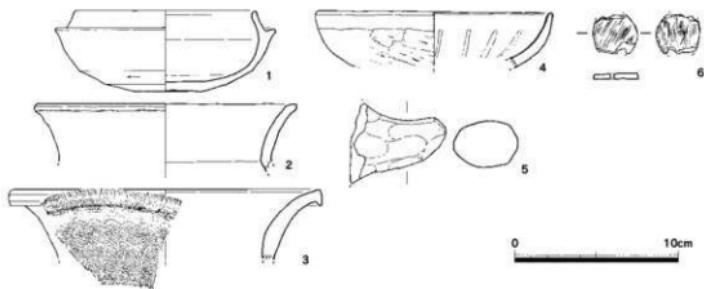


Fig. 18 ピット出土遺物実測図 (1/3)

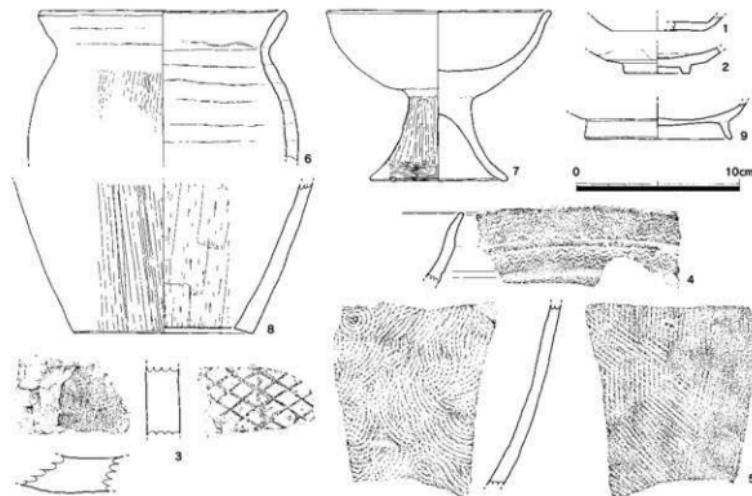


Fig. 19 遺物包含層出土遺物実測図 (1/3)

(Fig. 19)

1・2は白磁皿である。何れも底部の小片。1はいわゆる口禿げの白磁か。2は見込みの釉を輪状に掻き取るもので釉は緑色味が強い。外底部は露胎。3は平瓦の小片である。4・5は赤焼きのいわゆる似非土師須恵器。4は器台で口縁部の小片。5は瓶の胴部である。6～9は土師器である。6は甕である。底部を欠く小片で内面はヘラケヅリがなされず、粘土紐を積み上げた痕跡が明瞭に観察できる。7は高壺である。本来は堅穴住居跡の遺物か。底部を大きく欠損し器壁は磨滅、壺部外面下部に焼成時の剥落痕を有する。8は瓶の底部の小片。9は椀の底部である。

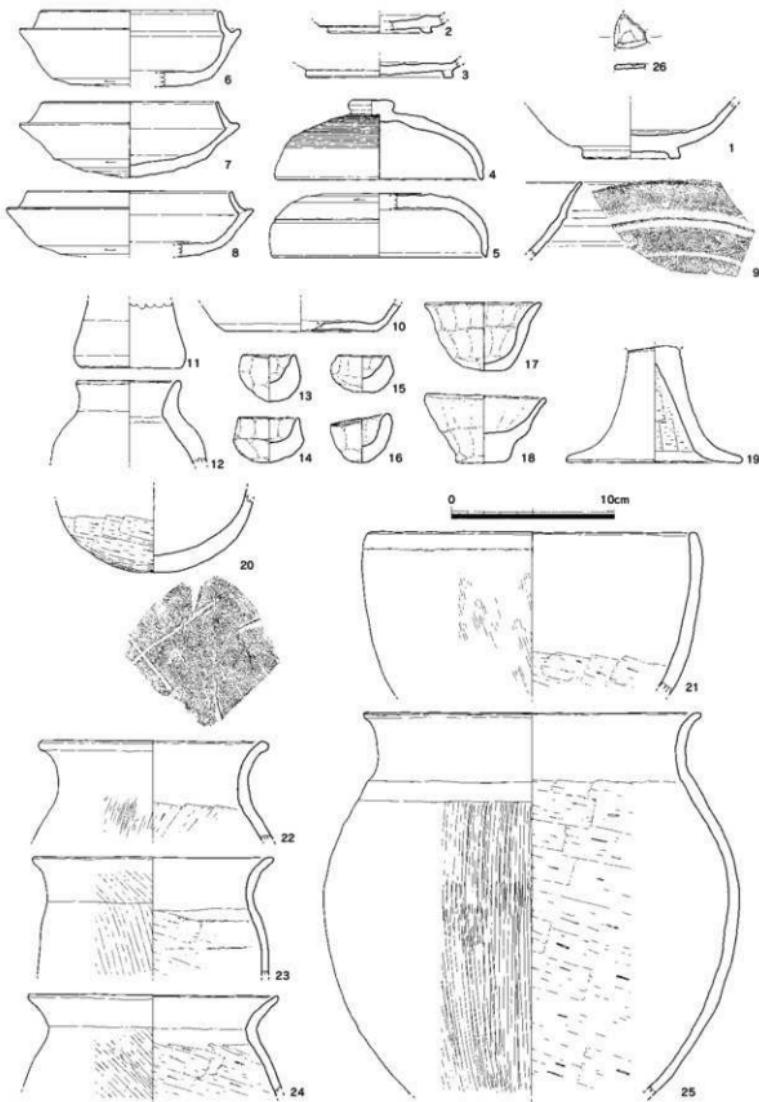


Fig. 20 第7層出土遺物実測図 (1/3)

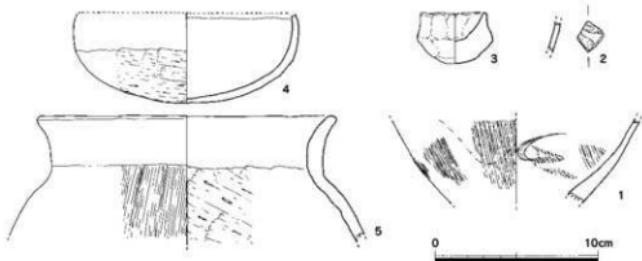


Fig. 21 その他の遺物実測図 (1/3)

(Fig.20)

1は龍泉窯系青磁碗である。底部の破片で見込み表面は磨滅する。

2~9は須恵器である。2・3は高台付杯で何れも底部の小片。4・5は蓋である。4はつまみがつぐもので高杯の蓋か。5は1/5個体程度の小片である。6~8は杯身である。何れもかえりが低く内傾するもので7は1/4個体程度残存する以外は小片である。9は器台である。口縁部の小片で堅緻に焼成される。

10~25は土師器である。10は杯である。底部の小片で器壁は磨滅が顕著である。11は支脚の底部で小片。12は口径が小さく壺様の形態で、外面に煤が付着する。13~18はミニチュア土器である。13~16は完形で出土。径3cmほどの粘土塊を、親指を中心にユビオサエで容器状に整形している。17・18はやや大形の個体で18は胴部を大きく欠損する。19は高杯の脚部で外面は丁寧にナデて仕上げられる。20・21は鉢である。20は底部の破片で器壁は磨滅が顕著だが外底面に十字形のヘラ記号が不定方向のヘラケズリの上から付される。21は口縁部の小片で外面にはナデ消しきれない粘土紐の接合痕が観察できる。22~25は壺である。22~24は口縁部の小片。22は器壁の磨滅が顕著である。23は口径17.0cmに復元される。24は胴部外面の器壁が剥落し大半が失われている。25は大形で1/6個体まで接合できた。底部を失うもの。胴部外面は粗なハケののちナデにておおむね平滑に調整されており、一部にうすく煤の付着がみられる。胴部内面は不定方向のヘラケズリで仕上げられるが、胎土中の砂粒が大きく器壁は凹凸が顕著である。

26は滑石製有孔円盤である。小片で全体に磨滅し、片側の正面が剥落する。

(Fig.21)

1・2・4は調査着手前に表面採集されたもの。1は同安窯系青磁碗である。本個体は小片のため復元的に実測したものだが、側面・断面は図示した状態よりやや寝る可能性がある。釉色は灰緑色で外面下部は露胎とする。2は陶器。外面のみ施釉され淡黄色の地に浅緑色で加彩される。緑釉陶器ないし多彩釉陶器の可能性があるため細片ではあるが図示したものである。4は土師器碗で2/3個体まで接合できた破片である。

3・5は調査区壁面から拾い出したもの。3はミニチュア土器である。1つの粘土塊から成形したもので外面上部にユビオサエの痕跡が顕著に残る。5は壺である。口縁部の小片で器壁は磨滅せずのこりは良好である。

第3章　まとめ

今回の調査では、井相田 A 遺跡の北端の状況を確認することができた。調査地周辺は宅地化が進んでいるが、残った畠地の地表を観察すると耕作土に土器の細片が含まれているのが見て取れる。大正末～昭和初期に作成された地形図からは井相田 A 遺跡が乗る微高地の中央に低地があり水田の表記が付され、現代でも地形の高低を窺うことができる。のことから、遺跡は谷を挟んで大きく南北に分かれるものと推測される。

今回の調査で検出した遺構の時期は古墳時代中期～後期と鎌倉時代で、土層観察ながら 2 面の遺構面を確認でき、後世の削平をあまり受けずに現代まで遺構が良好に残ってきた状況が窺える。なお、第 1 次調査で弥生時代中期初頭～前半頃の甕棺墓群が検出されているが、今回の調査では弥生時代の遺構は検出されなかった。ただし、第 5～7 層を掘り下げる過程で細片ながら弥生土器が出土しており、遺跡が乗る微高地のさらに南に弥生時代の集落や墓域が展開している可能性は高い。

今回の調査で検出した竪穴住居跡は 3 軒がそれぞれ切り合い、SC48→SC01→SC38 と変遷する。SC48 は南東角の主柱は据え替えた可能性があるほか、SC01 は主柱穴 2 本を据え替えている可能性が高く、これらの住居跡が長期にわたり維持された状況が窺える。住居跡の時期は、SC01 が 5 世紀後半～末頃と考えられるため、その前後 5 世紀半ば～6 世紀前半頃にかけて 3 軒の住居跡が構築されたものとみたまう。周辺では、井相田 A 遺跡の北西に位置する井相田 C 遺跡で古墳時代中期～後期にかけての集落が確認されており、今回の調査で検出された住居跡を含め御笠川中流域左岸の沖積微高地上に当該期の集落が点在していたものと推測される。

古代では、遺構は確認されなかったが第 7 層掘り下げの過程で 8 世紀頃の須恵器高台付壺や 9 世紀頃の土師器壺・椀が出土している。また、本調査区の西に隣接する第 2 次調査地点で検出された住居跡が古代と報告されている。のことから、当該期の集落が調査地の周辺に展開している可能性も考えられる。なお周辺では、水城東門ルートを挟んで西に位置する麦野丘陵に位置する麦野 A 遺跡で 8 世紀頃の竪穴住居が多く検出されている。

中世の遺構は溝と土壙を検出した。この時期の遺構は人為的な整地層である第 6 層を切り込んでおり、集落形成の過程で遺跡が乗る微高地の少なくとも北端部を盛り土し整地、北西方向に平坦面を造成しているものと推測される。

溝 SD16・19 は遺跡が乗る微高地の北縁に沿って構築されている。方向は周辺の水田にみられる条里の方向におおむね沿っており、整地の過程において条里の方向は意識されていたものと考える。また、溝の埋土に流水の形跡はなく当該期の集落の北を画する区画溝と考えた。この溝の北は崖となり急に標高を下げる。土壙 SK02 は屋敷に付随する水溜めないし井戸か。

溝の北側に位置する崖は昭和 40 年代の区画整理に伴い、調査地を矩形に広げるためか擁壁を付して埋め立てられているが、調査地と用水路を挟んで北に位置する水田やマンションとは 1m 以上の比高差がある。この崖は大正末～昭和初期に作成された地形図にも見て取れ、遺跡の北限を示すものと考えられる。

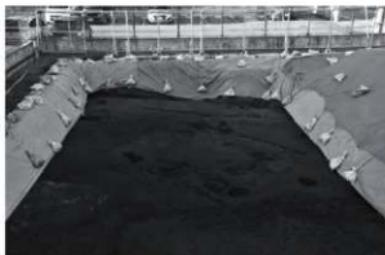
なお、調査区南壁の土層観察では第 6 層上面から切り込むピットが確認でき、掘立柱建物の存在に注意を払いつつ調査を進めたが、検出には至らなかった。ただし、全体図では調査区中央、SC01 を切ってピットが不整ながら並ぶ部分が見て取れる。これは木の根痕が大半であり建物跡ではないが、屋敷に付随する垣根様の設備を想定するべきかもしれない。



発掘調査着手前状況（南より）



調査区東半全景（南より）



調査区西半北部全景（南より）



調査区西半南部全景（北より）



調査区東壁土層（西より）



調査区東半南壁土層（北より）



SC01 東半床面検出状況（南より）



SC01 西半床面検出状況（北より）



Fig.7-1・2 出土状況（東より）



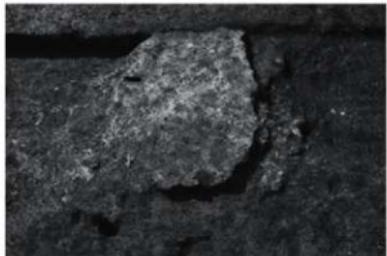
Fig.7-8 出土状況（北より）



Fig.7-4 出土状況（北より）



Fig.7-3 出土状況（西より）



SC01 カマド検出状況（東より）



SC01 カマド内 Fig.7-10 出土状況（北より）



SC01 カマド東西土層東半（北より）



SC01 カマド東西土層西半（南より）



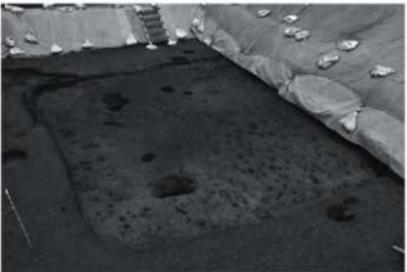
SC01 カマド南北土層南半（西より）



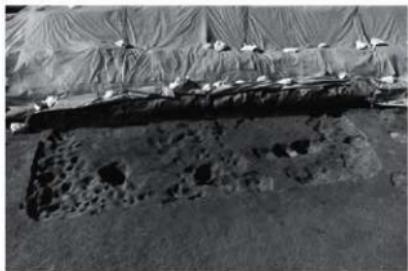
SC01 カマド南北土層北半（東より）



SC01P2 土層断面（東より）



SC01 西半完掘状況（南より）



SC01 東半完掘状況（東より）



SC38 完掘状況（東より）



SC48 床面検出状況（西より）



SC48 カマド検出状況（南より）



SC48 カマド東西土層東半（南より）



SC48 カマド東西土層西半（北より）



SC48 カマド南北土層南半（東より）



SC48 カマド南北土層北半（西より）



SC48 完掘状況（北より）



SK02（西より）



SP32 (東より)



SP32 土層 (東より)



作業状況 (南より)



発掘調査完了後状況 (南より)

報告書抄録

井相田 A 遺跡 1

—第4次調査報告—

福岡市埋蔵文化財発掘調査報告 第1469集

令和5年3月23日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目1番8号

印刷 川本印刷株式会社
福岡市博多区板付二丁目5番20号